

飛騨高山・町屋保存

防腐と着色、二つの観点から木部保護に用いる

小京都と呼ばれる岐阜・高山には、城下町の一角に形成された商人町の町並みが大火後の再建を経ていまでも残る。町並みを形作るのは、平入りの町屋。大きく、緩やかなごう配の屋根、軒先の真下を流れる水路、開口部にはめ込まれた格子、1階の小ぶりなひさし……。一つひとつの要素が一体になって、しっとり落ち着いたたたずまいを生む。地元で町並み保存の機運が高まってきたのは、昭和40年代。以来、一定の区域内では町屋の保存に必要な経費を補助する仕組みもできた。町屋の保存にあたる協同組合飛騨設計センター代表理事の大野二郎氏に、町並みの歴史や特徴と保存に向けた考え方を聞いた。



協同組合飛騨設計センター
代表理事
大野 二郎 氏

——高山の町並みはどのようにできたのですか。

大野 ● 豊臣秀吉の時代、金森長近氏がこの地を治めたのが始まりです。1588年には、高山城下の町づくりに取り組みました。金森氏は近江出身で、茶の湯をたしなむ文化人でもあったようです。出身の関係もあったのでしょう、町づくりでは京都をモデルに置いた、と言わ

れています。

高山には宮川と呼ばれる川が南北を貫いて、その東側には山が連なります。川を京都の鴨川に、山を京都の東山に見立てたのか、山のふもとには寺院を数多く配置しました。そして、東方の台地に武家町を、西方の低地に商人町をつくりました。当時の町全体は南北1km×東西500mほどの細長い形です。



平入りの町屋が並ぶ高山の商人町。軒の長さや高さ、通りに面した格子、軒先の真下を流れる水路などが、高山の町並みの特徴付ける

商人町は、米、豆腐、呉服、雑貨、小間物など、さまざまな商品を取り扱う商店街として栄えました。この地域の中心地として、周辺の集落からも買い物客が多数訪れたようです。明治の初期までは、県庁所在地の岐阜よりも人口が多かったほどです。

——商人町の町並みを構成する町屋はどのような特徴を持つのですか。

大野 ● 町屋は土蔵を除いて、明治初期の大火後に建て替えられたものが大半で、その後、戦災を受けなかったことから、建築当時の姿を残しています。

町屋は木造で、材料にはヒノキマツの一種を用いています。2階までの通し柱は、建築当時、木材を運んだいかに載る長さで決められていて、高山では約4mを標準にしています。前側2階部分の階高は約1.6mと低めです。

2階の屋根は1階のひさしを越す長さで、軒先の真下には雨どいの役割を果たす用水路が掘られています。軒の長さ、つまり1階壁面から用水路までは1.2～1.3mほどです。

木部の仕上げにはもともと、酸化鉄系の顔料、べにがらを用いていました。昭和30年代ごろから、維持補修の中でそれは次第に、油性やオイルステイン系の塗料に置き換えられていきました。一部の部材を取り替えた場合、塗料の染み込みが違って仕上がりにムラが生じることから、色は次第にべにがらの褐色から黒に近づいていきました。

——町並み保存の運動が始まったのは、いつごろからですか。

大野 ● 町並み保存の機運は昭和40

年代から高まってきました。「きれいな町を残さないか」と地元から声が出たのが始まりです。1966年(昭和41年)には、第1号の保存会ができました。これは、高山独自の生活単位と呼べる「屋台組」のまとまりで構成するもので、今年には18番目にあたる保存会が新しく立ち上がりました。

一方、高山市では1974年、市街地景観保存条例に基づく市街地景観保存区域を市内8カ所・計26.3haで指定しました。それに続いて、伝統的建造物群保存地区保存条例に基づく伝統的建造物群保存地区を、77年には市内約4.4haの区域で、2004年には約6.6haの区域で指定しました。ともに、町並み保存に向けて区域内の建築を一定の方向に誘導する一方で、必要な経費の一部を補助しています。

協同組合飛騨設計センターではこうした補助を受けた町屋の改修設計も手がけています。年間10件ほど受注していた時期もありましたが、最近は年間6件ほどです。それでも、市内で発生する町屋の改修設計の大半を手がけていると思います。

——木部の保全に関しては、どのような観点で臨まれていますか。

大野 ● 高山は雪が降るだけに、軒先で凍った雪が融雪水をせき止めることで起きる雨漏り、すもりを想定せざるを得ません。それもあって、屋根下地をはじめ、外壁下地や床下では防腐を意識しています。町屋は連棟式で隣り合う建物同士のすき間がほとんどないことから、通気性に欠けるという事情もあります。

町並み保存という観点からは、色も重要な要素です。市街地景観保存区域や伝統的建造物群保存地区では建物の道路に面する部分の色を、「べにがらにすずを混じた古代色、またはそれに類する色等、落ち着きのあるものとする」とか「保存地区にふさわしい落ち着きあるものとする」と定められています。こうした規定に沿った色を選ぶ必要があります。

——実際の現場では、どのように対応されてきたのですか。

大野 ● 木部の保護塗料には1970年ごろから、防腐と着色という二つの観点から評価できるキシラデコールを使っています。

先ほど申し上げたようにまず防腐剤として、屋根下地や外壁下地の部材に塗布しています。このほか床下の部材には、シロアリ防除剤のキシラモンを塗布しています。



建物の表面でひときわ目立つ褐色の格子とひさしを支える腕木。腕木の先端を白く塗るのも、伝統的建造物群保存地区内の約束事の一つ

色に関しては、より深みを出すために、複数の色を現場で調合するようにしています。いまは長年の経験があるので、どの色とどの色をどのような配合で混ぜ合わせればどうなるか、わかります。新しい色を作りやすいのは評価しています。

——キシラデコールを長い間ご利用になって、ご感想はいかがですか。

大野 ● 経年劣化を感じるようなことはないですね。建築物の維持や保存を考える上で、問題がなにも生じないというのが一番です。変わらない状態を維持できるキシラデコールを、着色と保護効果の両方を兼ね備えた木材保護塗料としてとても評価しています。

木とともに生きる。【キシラデコール】

キシラデコールに関する情報満載！

www.xyladecor.jp

10年保証
木材保護塗料
キシラデコール

品質保証：建設省認可の製品
採用率99.9%以上
2007年9月11日付



【お問い合わせ先】

販売総代理
日本エンバイロケミカルズ株式会社
TEL: 03-5444-9872 FAX: 03-5444-9860

大阪 〒541-0051 大阪市中央区備後町三丁目6番14号 アーパックス備後ビル TEL: 06-6268-3428 FAX: 06-6268-3420
東京 〒105-0023 東京都港区芝浦一丁目2番1号 シーパンスN館9階 TEL: 03-5444-9872 FAX: 03-5444-9860
www.jechem.co.jp